

数量平等を求める要請や抗議をたび重ね行ってきたおり、近年では何ら法的な縛りを受けない党内の代表選ですら、報道への条件を付けるに至っている。

そしてもう一つは、テレビ放送に限らない戦前からの日本の報道機関共通の、客観報道という名の中庸報道至上主義の呪縛である。不偏不党・中立公正こそが報道のあるべき姿であるという、崇高で伝統的なジャーナリズム観が放送現場においても支配的であるように思われる。実際に、日本の新聞・放送業においては、こうした政権批判はほどほどに、そして記事・番組は党派性を持たないという姿勢が、世界に類を見ないほどのメディアの特恵的待遇に結びついている面を否定できない。選挙期間中の政見放送というきわめてユニークな候補者・政党PR放送によって、臨時収入を得ている事実もある。しかし後者で言えば、今回の選挙で明らかになったように、放送媒体の価値低下か、超短期戦であったことの影響かは今後の検証が必要であるとはいえず、政党CMの減少とともに、政見放送の頻度も下がる傾向にあるとされる。メディア特恵待遇についても、活字媒体の再販制度や消費税軽減税率適用に対する批判も強く、十分な社会的合意があるかどうか怪しい状況になりつつある。それは放送企業にも適用されている所得税の優遇措置にも当然に影響を及ぼすし、先にあげた政見放送・経歴放送の制度自体の継

続を危うくするものである。

こうした各種の特恵的待遇の制度は本来、放送の自由をより保障するためにできあがったものであったが、もし逆に自由の足枷（あしづま）になっていたのであれば、潔く手放すという選択をする必要がある。あるいは制度維持のために政府の顔色を見ることはないと言いつけるのであれば、むしろ前者の政府や政党からの政治的圧力を恐れることもないということになる。

表1 「選挙報道」を制約する放送関連の法規定

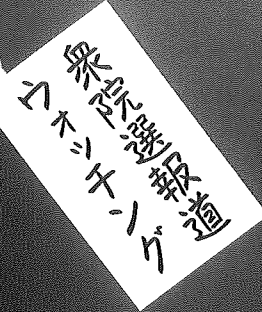
	選挙期間前 (実質選挙期間)	選挙期間中 (公示～前日)	投票日	選挙後 (平時)
放送法4条	政治的公平さ	政治的公平さ	政治的公平さ	政治的公平さ
公職選挙法 151条の3		選挙の公正		
実際の 番組作り	相当程度の平等性の担保(議席数に応じての配慮) 出演制限 ※「解散」後はより厳格適用	厳格な数量・質的平等の担保(議席数に応じての配慮、泡沫候補扱い) 厳格な出演制限・CM審査	一定程度の数量平等(出演にあたっての各局平等性の担保から)	緩やかな公平性の担保

具体的には、各局の没個性・横並びをいかに脱するかというのがその第一歩であると考え、特段難しいことをするわけでもなく、「伝えるべきものを、いま伝える」というジャーナリズムの原点に戻るだけの話だ。これができる条件の一つは、逆の意味で横並びができるかどうかにかかっている。選挙報道に強い萎縮が起きているのは、もっぱら「仕返し」を恐れていることと推察されているからだ。選挙中あるいは選挙後に、番組内容への不満から出演やインタビューを拒否される可能性をあらかじめ消しておくためには、無難な報道をするのが一番だ。

こうした不安を吹き飛ばすためには、万が一が起きた場合には、ほかの局も番組内容が理由での意地悪は認めないという強い意志を共有して、放送局の側から出演を断るといふ勇氣が持てるかどうかにかかっている。

と書きながらも、前途多難であることは想像できる。昨今の記者会見とは呼べない首相プレゼンの場の改善を求める記者クラブ内部からの声に、一部の放送局等が反対をして、今の閉鎖的で予定調和の会見を維持しようとする力が強く働いているからだ。中央に期待できないなら地方から、を期待するところだ。

あるいは現在は、候補者選挙を報じるに当たって、その映像の構図まで厳しい取り決めがなされていて、現場はその枠の中で工夫のしどころもない状態だ。そもそも報道してもらえない



なぜ、これほどまでにテレビの選挙番組はつまらないのか

山田健太 専修大学ジャーナリズム学科教授〈言論法〉



「コロナ禍」という状況の下で、岸田文雄新首相就任から衆院解散まで10日、さらに投票日まで17日という異例づくめの総選挙。結果は与党の圧勝となったが、そこに至るまでのテレビ報道のありようはどうだったのか。本来の政治報道、選挙関連報道とは、という観点から検証する。

2021年総選挙は盛り上がり欠け、選挙報道も総じて話題になることもなく終わってしまった、との評価が支配的だ。ではいったい、なぜ「つまらない」という印象を与えてしまったのか。逆に、選挙さらには政治報道の面白さとは何か。それらがそもそもの選挙期間中の報道に関する法社会制度とどのような関係があるのか。本稿では、膨大なコストをかけ続ける選挙関連報道・番組作りのうえで、そして何より放送法にいうところの日本の民主主義社会を維持発展させていくためにも、放送人の責務を果たすための素材を提供し、必ずやってくる「次」の選挙に向けての一助としたい。

制度から期待されるもの

選挙報道はがんじがらめで自由がないとすべての放送人が思い、行動しているように思われる。確かに表1に示す通り、一定の目安が示されていることは事実だ。しかしこれまた言うまでもなく、放送の自由は憲法で保障されており、

さらに放送法でもタメ押しとして確認されている。あくまでも「原則」は自由であって、一定の条件のもとで「例外」として制限を受けるに過ぎない。しかし現実には選挙期間中(公示もしくは告示から投票日前日まで)において、この原則と例外が逆転し、選挙の公正を実現するために政治的公平さを厳守する必要がある、その具体的な方策としては各党・各候補者を数量・質の両面において、可能な限り等しく扱うことで、自らの自由度を放棄することを頑なに守ってきている。

この原因は大きく二つある。一つは、政府・政党からのプレッシャーだ。政府は1990年代以降、放送法の解釈を一方的に変更し、放送法の番組編集準則を違法判断基準として捉え、しかもその判断権者は政府(総務省)であって、違法判断をした場合は電波を止めることもありうる、ということを繰り返して表明するに至っている。2016年の総務大臣発言及び政府統一見解の発表は、そのいわば最終形といってもよからう。これにプラスして2000年以降、現在の政権党たる自民党のみならず野党も含め、



自民党候補者の選挙演説会場

分野でも政治的なメッセージを含む作品が撤去させられたり、教育の分野でも政治的関心を持つことと自体が色眼鏡で見られたりするような状況にある。

半世紀以上の1969年に文部省は通達「高等学校における政治的教養と政治運動」を発し、未成年者が政治的活動を行うことを「教育上望ましくない」として禁止した。その結果、学内での反戦活動の禁止に留まらず、原発問題を文化祭で扱うことも良くないとされた。

ようやく2015年に、校外での政治活動については解禁したものの、事前許可制や申告制を採用する自治体が少なくない。最近でも高校

の合同文化祭の演劇で原発を扱ったところ、当該学校のみ地元ケーブルテレビ局が放送しなかったり、作品集から外したりといった措置が取られたと報じられている。結果として、せっかく選挙年齢が18歳に引き下げられても、「大人の事情」を押し付けることで、相変わらず「子ども」扱いの高校生は、政治事項はタブーのまま。そうしたいわば政治的無菌状態のまま大学生や社会人になるがために、政治は徹底拒まれ、忌避される対象のままなわけといえる。

先般の総選挙は4年振り、しかも新首相就任直後であったにもかかわらず、投票率もここ3回が過去最低のワースト記録と低迷している。年代別投票率でも近年では、全年代に比較して20代が20ポイント前後低いのが定番になってしまった。最高裁判官国民審査も15人中11人が対象になったものの、話題にすらならない寂しさだった。一方で、ヘイトスピーチに代表されるように、特定の集団に対する政治的社会的差別言動は相変わらず賑やかだ。21年10月から始まった「非表示」措置によって、荒れたネット空間の沈静化を試みているヤフーニュースのコメント欄(ヤフコメ)は、すでに100件以上が「消された」とされている。まったく関心がないのではなく、関心の発露が歪んでいるというところになる。

さらにいえば、こうしたネット上の誹謗中傷

を抑制するために刑法の侮辱罪を重罰化することが法制審で決まった。被害救済の即効薬として一時的に効果があるかもしれないが、こうした強圧的な抑え込みが一般化することで萎縮するのは、差別言動だけでない。むしろ、今でさえ縮こまっている政治的議論がさらに冷え込む可能性を否定できない。それでいうと、先述のフランスの話に戻れば、かの国では議論することが党派性を帯び対立を生むとされているわけだが、日本の場合には真逆で、日常的な議論がないがために対話の糸口がなく対立が起きているとは言えないか。

こうした歪みに大きく作用している可能性を拭いきれないのがテレビを始めとするメディアだ。少しでも選挙を話題にしたいという気持ちは買いたい。しかし「選挙割」でライオンが安くなることだけ報じたのでは、選挙を報じたことにはならないのではないか。だが実態はより深刻で、選挙期間中の夜の報道系番組でも、選挙をそもそも扱わないという選択肢が生まれ始めていて、投票直前に選挙を扱わないということは、社会の出来事から政治(選択のための選挙)をなかつたことにすることにつながるだろう。こうした課題がわかっていて変えられない事態が長く続けば、それが常態化し、変えるエネルギーはますます減退する。であればせめて表2の◎△の組み合わせを変えることだけでも始められないものだろうか。

政治性をどう組み込むか

一方で、選挙(期間)前や選挙後の選挙関連

ことがわかっていてる画を撮る者はいないだろう。それなら、オリンピック同様に各局共通素材でよいということになる。そのうえで曜日とか時間帯別に、各局ごとの責任制作をしたならば、そのほうがむしろ各局間の競争が生まれ、意欲的な番組ができるはずだ。選挙期間中の番組作りは、こんなことをあえて書かねばならない程度にまで追い込まれているように思える。

ついでにいえば、そもそも放送法4条の必要性も考え直したほうがよい。同条に掲げられるほかの3条件も同じだが、とりわけ「政治的公平さ」を求める項目は、もともとNHKの選挙期間中の報道を縛る規定だったものが、民放も含め、しかも放送番組一般に対象が拡大され立法化された経緯がある。そうしたいわくつきの規定を、今後もそのまま残しておくのが適切かという問いだ。ただし現場感覚では逆に、この規定が「あること」によって、特定候補者や政党への肩入れの危うさを排除したり、これらを求められた場合に忌避できる「言い訳」に使えるというメリットもあるようだ。しかし、毅然とした態度をとるために、自らを追い込み縛る規定を持つことは自己矛盾であるだろう。

報道あるいは政治報道にも、選挙報道をつまらなくしている大きな要因があることは否めない。日常的な番組作りが、政治との接点をあえて持たない作りになっているからだ。例えば、チャリティーやキャンペーンに多くの局が総力を挙げて取り組んでいるものの、視聴者個人ベースで障がい者に手を差し伸べるとか、プラスチックごみを減らして持続可能な地球に、といった「優しさ」を求めることで止まっただけではないか。

課題解決のために、目の前の政治をどう変えるか、政党の政策は現実の社会・政治課題と矛盾していないかといった、踏み込んだ報道はめつたにない。ましてや時間をかけて議論することも、意見の違う立場の者が対話する機会をテレビが提供することもほぼ皆無だ。そうした具体的な政治の話はテレビ向きではないとされるし、政治的話を扱うとなるとやさしくあるいはわかりやすさを求めることで、問題を単純化させてしまう結果、視聴者は喝采を送ることはあっても、悩んだり考えたりすることはできない作りになってしまいがちだ。

この間、「注目の選挙区」方式の劇場型の報道になつてしまったのではないか、各党の政策の違いは浮き彫りにできたのかといった、お決まりの指摘がなされ続けてきた。そうしたことを思うにつけ、表2のような課題はもちろんあるにせよ、視聴者のテレビとりわけ選挙報道離れはより根深いところに問題がある(関連して、

表2 番組ごとの報道種別のイメージ

報道種別	動静・当確	政策検証・比較	政治活動検証	横顔	政局
日常の政治報道・番組	△	○	◎	○	◎
情報系番組の扱い	△	△	×	◎	◎
ウェブ上での扱い	◎	◎	△	○	△
選挙期間中の選挙報道	○	◎ (比較中心)	△	△	△
開票番組(特番)	◎	△	×	◎	○

食卓で政治の話は禁物、とは元来のフランスのみならず日本でも一般に当てはまるだろう。しかしその理由は異なっていて、日本の場合にはそもそも政治性を持つことと自体が忌避される傾向が強い。したがって、その及ぶ範囲は芸術の

拙稿「選挙報道のお作法」選挙報道のお行儀、いずれも「民放online」2021年10月25日配信と11月17日配信参照。

報道を利用しないことについて

こうして考えてみると、さらに話は大きくなり、そもそも「報道」とは何かが問われることになる。各局の開票特番は「正確性、戦況分析安定感」が従来よりキーコンセプトとされているなか、今回のメインMCの顔触れを見て、6局中4局がNHK人選(OB、OG起用)で、まずは安定感を求めていることがわかる。同じことは、全局とも夜の報道もしくは報道系番組のメインキャスターを起用してきたことにも通じよう。それ以外にも、個性が強く人気がある情報系番組のキャスター起用も目立った。これらは、テンポの良さが期待されたものと見られる。また、アナウンサー出身が多いのも、同様のテンポや正確性に係る安心感が買われたものであろう。こうした特徴は、個別には挙げないものの表3から読み取れる。

そうしたことから、派手なスタジオ装飾など毎回シヨウ化が進む傾向にあつて、タレントをMCに据えることは、どう整合性がとれるのだろうか。そもそも「報道番組」として守るべき一線はあるのかという命題ともいえる。外形的な基準として海外の場合、民放の宿命ともいえるスポンサー等の広告からの独立性に気が遣われている。具体的には、キャスターはCMに出ない

いとか、ニュースの間には挟まないなどのルー化だ。しかし日本では、番組中にCMが流れるのは普通のことだ。

表3

局名・番組名	メインMC(所属・経歴)	世帯視聴率
NHK「衆院選開票速報2021」	瀧川剛史アナ(「NHKニュース7」キャスター)上原光紀アナ(同)	17.7%(1部)
日本テレビ系「zero選挙2021」	有働由美子(「news zero」キャスター・元NHK)櫻井翔(同・タレント)	10.8%(1部)
テレビ朝日系「選挙ステーション2021」	大越健介(「報道ステーション」ニュースキャスター・元NHK)大下容子アナ(「大下容子ワイド!スクランブル」キャスター)	7.2%(1部)
TBSテレビ系「選挙の日2021 太田光と問う! 私たちのミライ」	太田光(お笑いタレント)小川彩佳(「news23」キャスター・元テレビ朝日アナ)井上貴博アナ(「Nスタ」キャスター)ホラン千秋(同)石井亮次(「ゴゴスマ」キャスター・元CBCアナ)	6.2%(1部)
テレビ東京系「池上彰の総選挙ライブ」	池上彰(ジャーナリスト・元NHK)大江麻理子アナ(「ワールドビジネスサテライト」キャスター)	7.6%(2部)
フジテレビ系「Live選挙サンデー」	宮根誠司(「Mr.サンデー」キャスター・元朝日放送アナ)加藤綾子(「Live Newsイット!」キャスター・元フジテレビアナ)	7.6%(2部)

そうしたなかで注目すべきトピックは、開票速報の戦況分析・速報性・正確性が売りのはずのNHKが、獲得議席予測を大きく外したことだ。そもそも、出口調査等の人海戦術をベースにした情勢分析や開票速報、その究極形ともいえる開票率ゼロでの当確報道「ゼロ打ち」の意味合いについては多くの議論がなされている。その是非は別としても、自民党絶対安定多数の結果との開きは大きかったと言えよう(ちなみに朝日新聞が今回の情勢予測では最も結果と近かったとの評価を受けている)。それは、今回のみの特例的な「はずれ」というよりは、「限界」と見たほうがいいかもしれないし、少なくとも競馬レースと同じ感覚で開票特番を見せることの必要性については、見直しの時期にきているのではなからうか。

もう一つ、今回話題となったのは、TBSテレビでの爆笑問題・太田光のMC起用だ。問題は、彼の発言が滑ったのか、無礼なのかということではなからう。同局が「サンデージャポン」のメインMCである爆笑問題を起用することで、政治問題に対する親しみやすさを目指したとすれば、そうした思いは悪くないと思う。ただし、情報バラエティ番組としてではなく、あくまでも報道番組としての仮面を被らせようとしたことに問題があるのではないか。ずいぶん前になるが、当時の「サンデージャポン」担当者は同番組を報道番組であると位置づけてい

た。その思いは「サンジャポ・ジャーナリスト」の命名にも表れているようだ。筆者は同番組を報道番組とは認識していないが、もしノリを期待してMCに据えるならコンビで起用すべきであつたらうし、その軽さをきちんと引き継いで報道のフリをすべきではなかったであろう。そうした中途半端さが無責任さに繋がる危険性を示してしまったことが残念である。

民主主義のための放送

選挙制度↓政治性↓報道と話が進めば、次にくるのは「放送」そのものだろう。放送された番組がインターネット上で流れるのは当たり前で、すでに地上波放送局制作の番組が動画配信サイトで流れる時代だ。今回の選挙において、これまで以上に放送とネットの連動型の報道を積極的に採用した放送局も出てきた。しかも、

放送の焼き直しではなく、新たな要素や切り口で、各党・候補者の政策を分析したものなど、使い勝手のよさも含め今後の可能性を感じさせるものである。連動型といつてはみたものの、むしろネットだけで事足りるともいえる内容でもある。それは、放送とは何かを自らに問うことになるであろう。

冒頭のフレーズに戻るなら、放送は「健全な民主主義の発展に資するようにすること」(放送法1条)が求められている。さらに青臭いことをいえば、憲法で保障された表現の自由の実効的な行使を担わされている存在だ。だからこそ、放送人自らが放送を公共的な存在と位置づけ、そう宣言し、それがゆえに多くの特恵的な待遇をも享受してきた。そうであれば、まさに災害時における一所懸命さと同じように、場合によってはそれ以上の必死さと覚悟をもつて、選挙期間(実質的な期間も含め)においては、有権者に政治選択にとって必要な情報を提

供することは、公共性・公益性の最上位に位置するものはずである。

もしそれを放棄するのであれば、あるいは視聴率や政治家・政党を気にして市民に対する社会的責務を二の次にするのであれば、それは放送人を名乗る資格はないことにならないか。コロナ疲れ、五輪疲れ、そして自民党総裁選疲れ……視聴者も放送現場もさまざまな理由は付くかもしれない。しかし、コロナ禍による社会不安、政治不安が渦巻くなかで、戦後最短期間で投票率へと突入したことの準備不足・時間不足を、不完全燃焼の理由にはしておけない。

ここまで指摘してきたように、単に今回の選挙報道の問題ではなく、選挙期間中の制度由来するもの、政治報道そのもの、そして報道番組のあり方にも関係する根源的な問題が伏在している可能性が高い。だからこそ、きちんと自らの立ち位置と放送に期待されている番組のあり方を直視する必要があると思う。



やまだ・けんた 専門は言論論、ジャーナリズム研究。放送批評懇談会理事、日本ペンクラブ副会長など。選挙報道に関する著書に『法とジャーナリズム 第4版』『ジャーナリズムの倫理』『放送法と権力』。ほかに『愚かな風』『見張塔からずっと』、監修に『現代ジャーナリズム事典』など。

※表中「アナ」は局アナウンサー。ちなみに直近の国政選挙である2019年参院選での各局世帯視聴率は、NHK=14.7%、日本テレビ=10.6%、テレビ朝日=9.6%、TBS=5.8%、テレビ東京=6.0%、フジテレビ=6.2%であった。その前はテレビ東京の民放トップが4回続いていた。

週刊金曜日

編集委員
雨宮処凛 宇都宮健児
想田和弘 田中優子 崔善愛
中島岳志 本多勝一

1月の特集予定

共産党は変わるのか!?!
辛淑玉責任編集ページ
韓流

定期購読に支えられる週刊誌

半年 24冊 12,426円(1冊82円お徳)
1年 48冊 24,343円(1冊93円お徳)
*月極自動引落し(1冊70円お徳)もあります。

書籍のご案内

沖繩は孤立していない
世界から沖繩への声、声、声。
乗松聡子 編著
世界の識者が「オキナワ」への責任と決意を語る。3年にわたって「琉球新報」に掲載された「正義への責任」世界から沖繩へ!に加筆編集しました。
定価1,800円(税別)

お申し込みは

0120-004634 0120-554634

新規購読お申し込みの方に最新号進呈!

発送開始後の途中解約には応じかねます。
(株)金曜日http://www.kinyobi.co.jp/



GALAC

February 2022
No.297

編集	NPO放送批評懇談会
DTP	ビード:林 隆二
表紙の人	南 沙良
フォトグラファー	山崎祥和
スタイリング	長瀬哲朗 (UM)
ヘアメイク	小西神士

C O N T E N T S

THE PERSON 石山アンジュ
旬の顔 南 沙良

特集1 「東京2020」が遺したもの

- 東京2020とは何だったのか 編集部 13
- 〈インタビュー〉オリンピックレガシーの歴史と変質 山本 浩 17
- パラリンピックの現場から 後藤佑季 22

特集2 衆院選報道ウォッチング

- テレビ選挙報道の課題 山田健太 26
- 政党・候補者のSNS広報戦略 国枝智樹 32

連載

- 21世紀の断片〜テレビドラマの世界 藤田真文 38
- 番組制作基礎講座 渡邊 悟 42
- テレビ・ラジオ お助け法律相談所 梅田康宏 45
- 今月のダラクシー賞 松山珠実 46
- BOOK REVIEW 三原 治・音 好宏 47
- 報道番組に喝! NEWS WATCHING 水島宏明 48
- 海外メディア最新事情【ウィーン】 稲木せつ子 50
- GALAC NEWS 砂川浩慶 52
- GALAXY CREATORS [桑山知之] 風間恵美子 54
- TV/RADIO/CM BEST&WORST 56

ギャラクシー賞

- テレビ部門 60
- ラジオ部門 70
- CM部門 74
- 報道活動部門 78
- マイベストTV賞 80

はギャラクシー賞のトロフィー「バードマン」のシルエットです。バードマンはグラフィックデザイナー松永真氏の作品で、自由な創造と広い視野、自在なバランス感覚と自立の精神を象徴しています。

私のWOWOWコンテンツ論

Presented by W.O.W.O.W

#227

▼プロデューサー
山本和夫さん



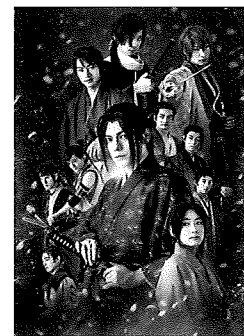
幕末の動乱期を舞台に、父を捜して京を訪ねてきた少女・雪村千鶴と、土方歳三ら新選組隊士との奇縁な運命とは。人気ゲーム「薄桜鬼」を原作としたドラマが、人気の2.5次元俳優・崎山つばさ主演で制作されました。今回はプロデューサーを担当した制作プロダクション、ドラマデザイン社の山本和夫さんに、作品の見どころなどをお聞きしました。

若者に受ける時代劇の原作は若い女性に人気があるゲーム——どのような経緯でゲームの「薄桜鬼」がドラマ化されたのでしょうか。山本■弊社は無料BS放送向けの時代劇を作っていたのですが、昨今は放送だけでなく配信もできるコンテンツが求められるようになってきて、時代劇にもその波が来ていました。ただ、シニア層をターゲットにしたこれまでの時代劇ではなかなか配信は難しいので、新しい時代劇を生み出す必要に迫られていたのです。

すでにアニメや舞台にもなっていたが、ドラマ化できないかと思いましたが、ドラマ化できないかと思いましたが、OWさんは若い視聴層を増やしたいというのを聞いていたので、この企画をプレゼンさせていただきました。——原作となったゲームの魅力は？山本■ゲームでは史実に沿った新選組のキャラクターが登場しますが、そこに鬼の血筋が入るというタークファンタジー的な要素があるのですが、史実は一切曲げていません。まず、そこがとても面白いと思いました。そして、父親を探して少女・雪村千鶴が新選組の中に入り込むというフィクションも織り交ぜられています。女性が入り込めない男の世界が、この少女を通して描かれていく点も大きな魅力だと思います。それも新選組の隊士が持つ野性的な部分と、繊細で優しいところの両面が描かれていくのです。

女性から見た新選組、そして隊士たちの生き様に注目して見てください

このあたりが女性ファンの熱烈な支持を得ている部分だと思います。ドラマ化するときは、ゲームが持つその世界観を変えないことを心がけました。原作を愛して制作していくこと、何よりも大事に考えました。崎山つばささんの演技は——主役の土方歳三を演じるのは崎山つばささんです。山本■演技力があり、土方歳三にイメージに近いという理由で彼に主演をお願いしました。また、舞台で人気作品のキャラクターを多く演じていて、「2.5次元俳優」として高い人気を誇っているのも大きな決め手でした。撮影では、ふだんは男らしく毅然と振る舞っているけれど、たまに雪村千鶴にちよつとした思いやりを見せる。そのギャップが何とも絶妙でした。まさに見ている人がキュンとくるような演技を随所で披露していました。雪村千鶴の役は、ゲームにおけるヒロインという重要な役柄なので、なるべく多くのなかから原作のイメージに近い人を選ぼうと思いましたが、オーディションを開催しました。200人近い応募があったのですが、若柳琴子さんは当時弱冠16歳ながら、感情豊かな演技を見せていたので満場一致で彼女に決まりました。そして、撮影では初日から「あ、千鶴がいる」と、スタッフ一同感心して見ていました。



WOWOWオリジナルドラマ
薄桜鬼
1月7日(金)スタート(全10話)
【第1話無料放送】
毎週金曜日夜11時30分
WOWOWプライム
WOWOWオンデマンドにて
放送同時配信、アーカイブ配信あり
原作:オトメイト
(メディアファクトリー/デザインファクトリー)
脚本:保木本真也
音楽:諸橋邦行
監督:六車雅宣、西片友樹
出演:崎山つばさ/若柳琴子
矢野聖人/金井成大/
永田崇人/福山康平/
時任勇気/オチノコジ/
伊万里有/中林大樹/
田中幸太郎

——この作品をどんな人に見てもらいたいですか。山本■もちろん、ゲームを知っている若い層に見てもらいたいですし、崎山さんをはじめとする男性俳優のファンにも見てもらいたいです。また、撮影は東京都撮影所で行いましたので、時代劇ファンにも楽しんでいただけるような作品です。WOWOWさんのコアな層にもぜひ見てもらいたいです。——どのような点に注目してもらいたいですか。山本■男たちの世界のなかで、少女・雪村千鶴がどのように成長していくのを見届けてほしいです。そして、女性からは新選組はどのように見えているのか、隊士たちの生き様はどうなのかという点にも注目していただけたら、より深く楽しめるとと思います。

はみだしWOWOW情報 「攻殻機動隊 S.A.C.」シリーズの神山健治監督・脚本による新作オリジナル長編アニメ。前代未聞の犯罪計画をきっかけに、過去にとらわれていた2人の時間が動き出す……。『永遠の831』は、1月30日(日)夜8時からWOWOWプライムでオンエア開始。WOWOWオンデマンドでも同時配信。